

成沢家 父方の記録

成沢城跡

義の譜

ぎのふ

成沢城から、雪の苗穂へ。

成沢城の侍から、成澤義雄まで | 2026年7月 編纂（取材継続中）

表紙写真：「成沢城跡」の標柱と瑞穂（山形市・2013年4月）／撮影：成沢恵（家蔵）

一枚の家系図から

PROLOGUE

出羽の国に、成沢城という城があった。

——そこを守った侍・成沢道忠が、この家の先祖だと伝わる。

父・義雄は言う。「先祖を辿ると、**成沢道忠**という田舎侍に行き着く」「先祖は百姓兼田舎侍だ」と。山形県鶴岡市大山のあたりが、その土地だという。名字の「成沢」は、地名から起こった——大雨のとき沢が轟音を立てて「鳴る」ことから「鳴沢」、のちに「成沢」。その名を負う城が、出羽の山あいを実在した。

成沢城は、出羽の大名・最上氏の一族が築いた山城である。最上家の祖・斯波兼頼の孫**兼義**が一三八三年に築き、地名を取って「成沢」を名のった。以来およそ二百四十年、最上領の南を守る最前線の城でありつづけた。その系譜の末に立つのが、伝説の武将・**成沢道忠**——この城とともに語り継がれた、この家の先祖である。

その侍の家が、なぜ庄内・鶴岡の在に移り、百姓を兼ねる田舎侍となり、やがて海を越えて北海道・苗穂へ渡ったのか。そして八人きょうだいの七男が、なぜ英語学者になったのか。二〇二六年七月に届いた一枚の家系図（幕末の**成澤勘左エ門**に始まり、父・義雄の世代までを記す）を手がかりに、その長い道のりをたどるのが本書である。

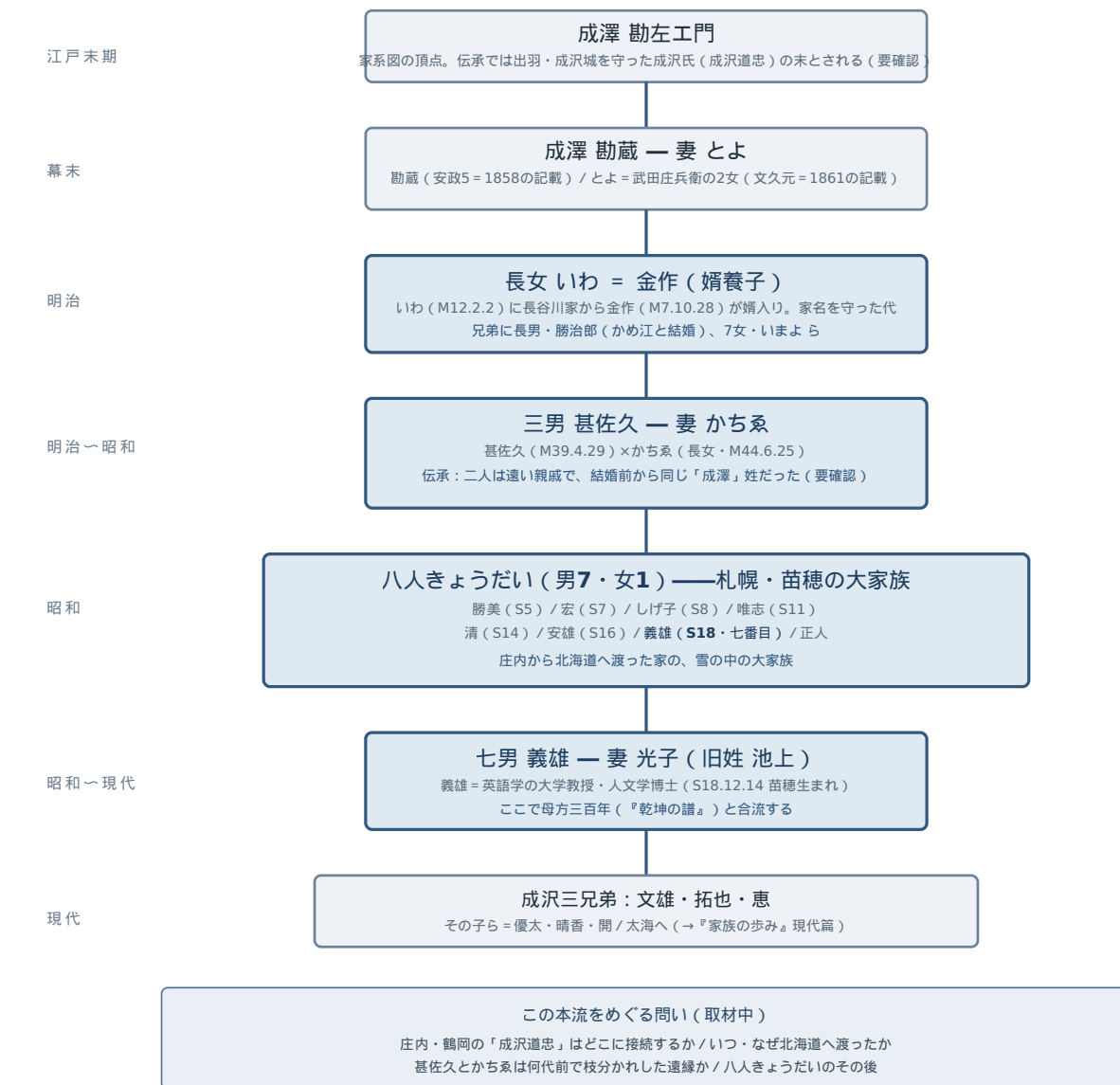
見取り図	父方の本流 —— 幕末から義雄まで
第一部 源流	庄内・鶴岡の伝承／幕末の成澤家／婿養子の家
第二部 苗穂	甚佐久とかちゑ／八人きょうだい
第三部 義雄	雪の街に生まれて／英語の道／海を渡った教育者
資料編	家系図（原本写真・書き起こし）／年表／結び・要確認事項

資料の取り扱いについて。本書の核は家蔵の家系図一枚（2026年7月受領）と、義雄本人・家族の証言である。写真からの判読には誤りがありうるため、断定できない事項は「要確認」と明記し、推測による脚色は加えていない。取材の進展にあわせて更新する。

父方の本流 —— 幕末から義雄まで

THE MAIN LINE

家系図（家蔵）にもとづく。藍色＝本流。日付は判読値（要確認）。



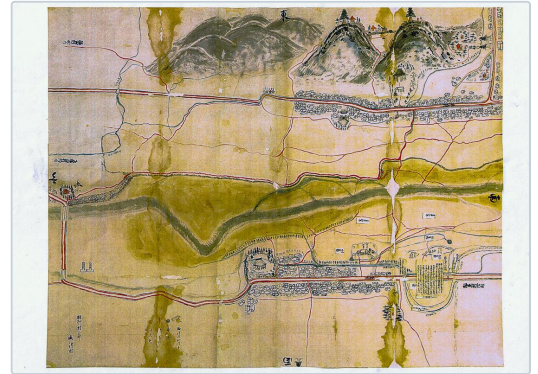
出羽の山城 ― 成沢城と成沢氏

NARISAWA CASTLE

この家の名字の源には、ひとつの城がある。出羽国・いまの山形市の南、蔵王のふもとに築かれた山城――**成沢城**である。

南北朝の一三八三年（永徳三年）、出羽の大名・最上家の祖である斯波兼頼の孫**兼義**が、須川のほとりに城を築き、やがて「成沢」の地へ移した。兼義はその地名を名字とし、**成沢氏**を称する。以来この城は、長谷堂城と並んで**最上領の南を守る最前線**として、およそ**二百四十年**ものあいだ在りつづけた。標高二〇〇メートル、比高六〇メートルの、山を利用した堅い城だった。

「成沢」という地名そのものが、この土地の険しさを語っている。もとの字は「**鳴沢**」――大雨のとき、沢の水が一気にあふれ、轟音を立てて「**鳴る**」ことから来た名だという。荒ぶる水の音を名に持つ沢の城。それが、成沢という名字のふるさとである。



成沢城の絵図。山あいには曲輪と堀をめぐらせた山城の姿が描かれている。（出典：My favorite things about Yamagata）



上空から見た現在の城跡。本丸広場・二ノ丸跡・外堀、そして城名の由来「鳴沢川」の位置がわかる。（出典：同）



本丸跡。土塁と曲輪の地形が、いまでも山上に残る。（出典：同）

伝説の武将 ―― 成沢道忠

成沢氏の系譜は、兼義から義総・義佑・義清と続き、その末に**成沢道忠**が現れる。この道忠こそ、家に伝わる先祖である。伝承の道忠は豪傑である。一五七〇年代、上山勢と伊達勢が最上義光に対峙した**柏木山合戦**では、齢七十にして成沢城を守り、一五八五年の**安保攻め**では五千騎を率いて敵城へ攻め寄せたという。義光の死後は跡目争いに敗れ、陸奥へ落ちのびた。（もっとも、これらの武勇伝は年代が合わず、成沢氏の親子二～三代の事績を道忠一人にまとめた「伝説」だろうと研究者は見る。それほどに、語り継がれた名だったということでもある。）

そして一六二二年（元和八年）、**最上家が改易**となり、成沢城は廃城となった。二百四十年の城の歴史が閉じ、成沢の侍たちは、仕える主を失って各地へ散っていく。

「義」の名跡。系譜を眺めていて気づいたことがある。兼義・義総・義佑・義清――**最初の成沢家は「義」の一字を代々継いでいた**のである。それから六百年。苗穂の八人きょうだいの七男は、赤穂義士討ち入りの日に生まれたことから「義雄」と名づけられた（→第三部）。名づけの由来はまったく別だと分かっている、六百年ぶりに「義」の字が戻ってきたようで、少し嬉しい偶然である。

要確認：この成沢氏（山形・最上）と、のちの鶴岡・大山の成沢家との直接のつながり（下記・第一部(2)）。

末裔、城に立つ ― 二〇一三年の成沢城

DESCENDANTS AT THE CASTLE

この城跡には、すでに立った成沢がいる。三男・恵である。先祖の足跡をたどるために、この地を訪問していた。

二〇一三年四月、恵は妻の瑞穂とともに、先祖の足跡をたどるために山形の成沢城跡を訪問した。兄弟が家系図を手にして本格的に系譜を調べ始めるより、十三年も前のことである。城跡は小高い山の上にあり、八幡神社が建ち、周囲には田畑が広がる。天守は再建され、桜の季節だった。山上から地形を眺めれば、この城が最上領の南を守る要所であったことが、おのずと納得される。



「成沢城跡」の標柱と恵（2013年4月）。六百三十年前に「成沢」の名が生まれた場所を訪ねた末裔。（家蔵写真）

それから十三年。兄弟が家系図を読み解き、この城が一族の名の源だと確かめたとき、恵のアルバムから二十九枚の写真が出てきた。本書がいま辿ろうとしている道を、弟はすでに十三年前に歩いていたのである。系譜を調べるという営みは、この兄弟のあいだで、誰かの思いつきで始まったのではなかった。

ちなみに末弟が先祖の城を訪ね、次男と長男が野蒜の海（→『乾坤の譜』）で釣りをしていたことを思えば、この一族はどうやら、ゆかりの土地に自ずと足を向ける性分らしい。

※地名の元の字は「鳴沢」。城跡のかたわらの標柱にも「成澤城趾」と旧字で刻まれている。



境内の「成沢城跡」の柱のかたわら、八幡神社へ向かう瑞穂（2013年4月）。夫婦二人の、先祖をたずねる旅だった。（家蔵写真）

城を失って ― 鶴岡・大山の田舎侍

FROM CASTLE TO COUNTRYSIDE

最上改易と、庄内への道

一六二二年の最上改易ののち、旧領は分割され、庄内には酒井氏が入って庄内藩が置かれた。禄を失った最上の侍たちの多くは、刀を鋤に持ちかえ、土地に根を下ろして生きる道を選んだ。家に伝わる「先祖は百姓兼田舎侍」「鶴岡市大山のあたり」という言葉は、まさにこの姿と重なる――かつて成沢城を守った侍の一族が、庄内の在郷に移り、田を耕しながら帯刀の家格を保った、という筋である。大山は酒造で栄えた町で、かつて大山藩も置かれた地。城を失った侍が身を寄せるにふさわしい、豊かな在郷であった。

※戦国の道忠（十六～十七世紀）と、下の家系図の頂点・勘左エ門（幕末＝十九世紀前半）の間には、およそ二百年の空白がある。「先祖は成沢道忠」は、世代を大きく飛び越えた遠い言い伝えとして受けとめたい。両者を結ぶ確かな記録は、これからの取材の宿題である。

幕末の成澤家 ― 勘左エ門から勘蔵へ

家系図の頂点には成澤勘左エ門、続いて成澤勘蔵の名がある。勘蔵には「安政五年」（一八五八年）、妻・とよには「文久元年」（一八六一年）の記載――ペリー来航から数年、幕末の動乱を生きた夫婦である。とよは武田庄兵衛の二女。とよが昭和二十一年（一九四六年）まで生きたという記載が正しければ、幕末生まれの人が、終戦の翌年まで一族を見守っていたことになる。長女・いわには金作が婿養子に入り（金作は長谷川竜五郎の家の出とみられる）、娘に婿を取って家名をつないだ。その子の代に、次章の甚佐久が生まれる。

要確認：「安政5.3.25」「文久元年9.15」等の日付が生年か没年か。勘左エ門より前（成沢城の侍まで）の代。金作＝長谷川竜五郎の子の確定。鶴岡→北海道への移住が誰の代・いつか。家紋（最上・成沢氏との一致は接続の傍証になる）。

雪の大家族 ―― 甚佐久とかちゑ

THE FAMILY IN NAEBO

遠い親戚どうしの結婚

いわと金作の三男・**甚佐久**（明治三十九年＝一九〇六年生まれの記載）は、**かちゑ**（明治四十四年＝一九一一年生まれの記載）と結ばれた。家族の伝承によれば、二人は**遠い親戚で、結婚前から同じ「成澤」の苗字だった**という。家名や土地を守るために同族の遠縁と縁組みする――旧家には珍しくない、家の存続を賭けた結婚のかたちである。二人がどの代で枝分かれした縁者なのかは、これからの取材で確かめたい。

八人きょうだい ―― 男七人、女一人

甚佐久とかちゑは、札幌・**苗穂**の地で八人の子を育てた。男七人、女はしげ子ただ一人。昭和五年の長男から敗戦をはさんで、雪の街で次々と生まれた大家族である。（家では長く「農家の家」と語り継がれてきたが、義雄によれば**苗穂の家は農家ではなかった**。甚佐久が何を生業としていたかは、これからの取材で確かめたい。）

1 勝美	昭和5年（1930）2月3日の記載
2 宏	昭和7年（1932）1月3日の記載
3 しげ子	昭和8年（1933）11月9日の記載。 唯一の女子
4 唯志	昭和11年（1936）10月19日の記載
5 清	昭和14年（1939）2月26日の記載
6 安雄	昭和16年（1941）7月25日の記載
7 義雄（父）	昭和18年（1943）12月14日（本人確認済み）
8 正人	生年月日は判読不確か（9月13日の記載）。末子

※名前・日付は家系図（写真）からの判読。正人の生年など不鮮明な箇所は要確認。きょうだいの現況（存命・居住地）・それぞれの人生は、今後の取材課題。

家系図が正した一つの事実。父・義雄の生年は、長く家の記憶で「昭和十四年」とされてきた。だが家系図は「昭和十八年」と記し、きょうだいの生年の並び（清＝昭和14→安雄＝昭和16→義雄）とも合う。本人に確かめると――**昭和十八年（一九四三年）十二月十四日が正しかった**。一枚の紙が、七十年来の思い込みを正した。

苗穂の家 ―― 杏の木のある家

この苗穂の家を、孫の拓也は夏の帰省で覚えている。庭には**杏（あんず）の木**があり、実を採った記憶がある。隣には長男・**勝美**の一家が住んでいた。勝美は無類の車好きで、とりわけ日産を好んだ――のちに弟・義雄が日産の車を乗り継ぐのは、この兄の影響だという。勝美の子とみられる「ノブちゃん」はバイクを愛し、のちに仙台へ移って、義雄・光子とも交流を続けた。（苗穂の家の生業や暮らしの細部、勝美一家の人びとの名や現況は、これからの取材で確かめたい。）

雪の街に生まれて —— 七男・義雄

YOSHIO, THE SEVENTH SON

昭和十八年（一九四三年）十二月十四日、義雄は札幌・苗穂に生まれた。戦争のさなか、八人きょうだいの七番目。誕生日は**赤穂浪士討ち入りの日**——その所以で、赤穂義士の「義」を採って「義雄」と名づけられた。庄内の田舎侍の血筋に、忠義の日の名前である。

終戦のとき、義雄はまだ幼かった。進駐軍の兵士にもらった**一本のコーラ**が、アメリカへの憧れの原点だった——と家族は伝える。八人きょうだいの七男は学問の道を選び、**岩見沢教育大学**から**北海道大学大学院**へ。英語学を修め、**宮城教育大学**の助教授として仙台へ赴任する（次男・拓也が生まれる直前のことだ）。のちに**東北学院大学**の教授へ。妻・光子との結婚のとき、光子の父・池上茂雄（理学博士）は「成績が一番と二番の天才同士が結婚した」と喜んだという。結婚した当初、義雄はまだ大学院生で定まった収入がなく、ひと足先に高校教師となっていた光子が家計を支えた。

雪と、剣道と、自転車と —— 若き日の義雄

雪の街に育った義雄は、**スキーもスケートも得意**だった。晩年、息子に「どちらが得意だったか」と問われると、少し考えて「スキー」と答えている。その腕前は仙台へ移ってからでも衰えず、**宮城県のスケート大会（成人の部）に出場して上位に入った**ほどである。（もっとも息子・拓也に言わせれば、雪国では誰もが滑る。「仙台に来たから得意に見えただけで、北海道に置けば光るほどの腕ではない」——正直な家である。）ふだん子育てに関わらない義雄が、冬のあいだだけは息子たちをスキー場やスケート場へ連れ出した——その顛末は、現代篇『家族の歩み』に詳しい。

そしてもうひとつ、義雄には**剣道**があった。かなりの腕前だったようで、オーストラリアに長期滞在していた時期も、現地で稽古を続けていたという。庄内の田舎侍の裔が、南半球で竹刀を振っていたのである。（段位や始めた時期は要確認。）

継承ノート —— 武の血。義雄の剣道は、孫の**開**（文雄の次男）に流れた。開は剣道でインターハイまで進んでいる。祖父から孫への一世代飛ばしの直系であり、遠景に成沢城の老将・道忠を置けば、「武の血」は六百年ごしに戻ってきたことになる（道忠の部分は、例によってこじつけである）。

学者になる前の義雄は、存外に活動的だった。大学時代は**サイクリング部**に入り、自転車で北海道の各地を巡ったという。仙台へ移ってから、中山の公務員宿舎の物置には、サドルのない古いロードバイクが眠っていた——「サドルは盗まれた」と本人は言っていた。

車も好きだった。**ダイハツ・フェローマックス**に始まり、日産の**サニー・スタンザ・セドリック**、そして**トヨタ・カムリ**と乗り継ぐ。日産づいてるのは、車好きの兄・勝美の影響である。英語学者として車名の「サニー」を「英語としてはおかしい」と評しながら、そのサニーに乗っていたのは、いかにも義雄らしい。雨の日、そのサニーで三台がからむ事故に遭ったこともある（対向車線からはみ出してきた改造車が原因だった）。大きな怪我はなかったが、以後、足の付け根に痺れが出るがあったという。

のちに息子・拓也は、三十代の終わりから四十代にかけて（二〇一一～一七年ごろ）、ロードバイクに深くのめり込む——六台を乗り継ぎ、遠征費も含めれば五百万円を超えるほどに。その遠い伏線は、案外、この物置に眠っていた一台にあったのかもしれない。

[illegible]

海外出張の多い研究者だった。オーストラリアには幾度も渡り、長いときは一年（幼い拓也たち家族を一ヶ月呼び寄せた）。イギリス赴任には光子も同行した。そして一九九五年、フルブライト研究者（Fulbright Scholar）として米国デラウェア州のウェスレー大学に客員研究員として迎えられ、五月まで日本の歴史・文化・教育を講じた。現地の二紙が義雄を大きく取り上げ、日米の教育を語るインタビューを載せた——「われわれの制度は硬直的で、あなたがたの制度は柔軟だ」。コーラー本から始まったアメリカへの憧れは、教壇の上で果たされた。のちに人文学博士（Doctor of Humanities）——ウェスレー大学からの名誉学位である。

day, April 12, 1995

Taste of America was a sip of Coke

at Wesley College.

The discussion will focus on the connection between education and a society's level of prosperity, a topic on which Narisawa is verbose.

"Because the United States is the most important country to Japan — it's our biggest trade partner — our prosperity depends on the U.S.," Narisawa said.

"Most Japanese don't like studying but Japan is a small country with a population density the highest in the world. We don't have a lot of natural resources. We have to import raw materials, process it, then export it. So we must use our brains, otherwise we are starved," he said.

As the Japanese economy is growing and Asians are investing both money and education in the future, Narisawa sees the center of the world shifting to the Eastern hemisphere in the next century.

"The world has completely changed. The U.S. is a huge country and although it is wealthy it must compete all over the world. You must compete with us and we must compete with you," Narisawa said.

IT IS FOR SUCH REASONS that Japanese students are obliged to learn English, Narisawa said. The "international business language." English is studied for almost 10 years.

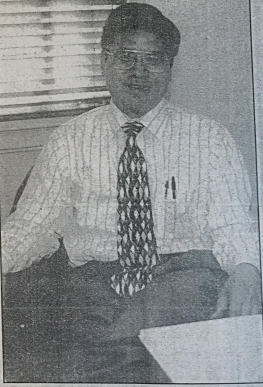
"English is a huge market in Japan. The Japanese invest — after that we get profits. Americans are short-ranged, short-sighted. To them, the Japanese seem to be very slow and steady, but to us you're so rushed," he said.

Yet nonetheless, to visit the United States is a voyage to be envied by fellow Japanese, Narisawa said. Not only is such a trip a source of pleasure, but a learning experience as well — another investment for the future.

"We must know each other's lifestyle, the way of thinking, otherwise we can't communicate," he said.

Narisawa invited Americans to share in the experience.

"Please learn Japanese, learn our lifestyle. Then come to Japan to do business and you're sure to be successful. America is a big country, but the world is bigger and more interesting," he said.



soldiers in Japan look at their magazines and English — and houses, big cars,

and in color, in a out of an economic to Japan a taste of ally.

merican G.I. gave me hat it was. I looked ad a strange taste."

the United States.

ago, this introduction foundation for States. Now on this old Tokoku Gakuin of English linguistics Wesley College lectures on Japan. He will present a lecture" at 7 p.m. (the College Center

NEVER Clean Your Gutters Again

U A R A N T E E D

With Gutter-Helmet™

- Eliminates safety hazard of climbing on the roof.
- Low Investment - lasts for years.

Ideal Protection for Winter Months

Call your authorized dealer for a FREE Home

it clog with leaves, pine
dles or seed pods.
dis over existing gutters,
ally maintenance free.

VISITING PROFESSOR Dr. Yoshio Narisawa of Tohoku Gakuin University in Sendai, Japan. He will be lecturing on Japanese history, culture and education at Wesley College until May. Photo by Diane M. Kovach.

10



東北学院大学の学長応接室で開かれた昼食会。ウェスレー大学から義雄に**人文学名誉博士号 (honorary Doctor of Humanities)** が贈られた。前列左からミラー博士、成沢博士、クアマツ博士。（家蔵／米紙掲載）

家庭での義雄——「宇宙人みたいな父」、枕元の自作物語に毎回登場するアントニオ猪木、オーストラリア土産のプーメラン、運動靴に大書された「なりさわ」——は、現代篇『家族の歩み』に詳しい。

この一枚が正した事実。米紙の掲載年は長く「1990年」と伝えられてきたが、実物の見出しは「**Wednesday, April 12, 1995**」。4月12日が水曜だったのは1995年である。年を1995年に正すと、記事中の「51歳」も昭和18年（1943）12月生まれと一致し、生年の裏づけともなった。

要確認：フルブライトの研究テーマ。『Delaware State News』掲載記事の正確な掲載日（切り抜きに写らず）。記念写真の同席者の和名（クアマツ博士／ウェスレー大学美術教授 Lon Fluman ほか）。岩見沢教育大学の正式名称（当時の北海道学芸大学岩見沢分校か）＝義父・池上茂雄が教鞭をとった校と同じであれば、義雄と光子の縁の起点にもかかわる。

家系図 ―― 書き起こし

THE FAMILY TREE

成澤家（父方）家系図（家蔵・2026年7月受領）を書き起こした要旨。左端の成澤勘左エ門から、右列の八人きょうだい（義雄の世代）まで、五代が一枚に収められている。※家系図の原本写真は家蔵資料（オリジナルデータ）として別途保管し、本書には掲載しない。

第一世代	成澤 勘左エ門
第二世代	成澤 勘蔵 ― とよ（武田庄兵衛の2女。没 S21.2.14の記載）
第三世代	長男 勝治郎（M19）＝かめ江（M25・斎藤清太郎の長女）／長女 いわ（M12）＝金作（M7・婿養子、長谷川竜五郎の家から）／7女 いまよ ほか
第四世代	てつゑ（長女）／誠太郎（長男・M31）＝やよゑ → 松太郎・政雄・光子・國雄・秋子・花子・康雄ら／甚佐久（3男・M39）＝かちゑ（長女・M44）／4男（M42）／立身（5男・T4）／すゑの（3女・T8）ほか
第五世代	甚佐久×かちゑの8人：勝美・宏・しげ子・唯志・清・安雄・義雄・正人

※詳細な書き起こしと判読メモは素材DB「ルーツ」成沢家父方家系図」に収録。第四世代の「光子」は父方の別人であり、母・成沢光子（旧姓池上）とは無関係（混同注意）。中段の一群（いちせ・さだ子・春雄・勝雄・木子・きく子・利夫）の親は未確定。

年表 ―― 家と時代

CHRONOLOGY

1383（永徳3）	最上直家の孫・兼義が 成沢城 を築城、地名を取り 成沢 を称す（成沢氏の起こり）
1578（天正6）	柏木山合戦。成沢城が最上義光方の前線基地に。成沢氏は最上領南の守り
～1600頃	伝説の武将 成沢道忠 が成沢城を守ると伝わる
1622（元和8）	最上家改易、成沢城廃城 。庄内に酒井氏。成沢の侍は各地へ散る（→鶴岡・大山への道か）
安政5（1858）	成澤勘蔵にかかる年記載（生年か。日米修好通商条約の年）
文久元（1861）	とよ（武田庄兵衛2女）にかかる年記載
明治7（1874）	金作（のち婿養子）生まれの記載
明治12（1879）	いわ（勘蔵の長女）生まれの記載
明治39（1906）	甚佐久（いわ・金作の3男）生まれの記載
明治44（1911）	かちゑ生まれの記載
昭和5～（1930～）	札幌・苗穂で8人きょうだいが次々誕生（勝美～正人）
昭和18（1943）	12月14日、義雄誕生 （8人の7番目。赤穂義士討ち入りの日）
昭和21（1946）	とよ 没の記載（幕末生まれの祖母、終戦の翌年まで）
終戦直後	幼い義雄、進駐軍兵士にコーラをもらう——アメリカへの憧れの原点（家族の伝え）
昭和40年代	義雄、岩見沢教育大→北大院→宮城教育大助教授（仙台へ）。1969年、光子と結婚
1995（平成7）	フルブライト研究者として渡米。ウェスレー大学客員研究員（～5月）・現地二紙に掲載。ウェスレー大学より人文学名誉博士号
2026（令和8）	家系図を受領・精読。本書『義の譜』を起稿（取材継続中）

※年表の幕末～明治の項は家系図の判読値。生年か没年かを含め、戸籍・除籍謄本での裏づけが今後の課題。

北の血、南の血

EPILOGUE

庄内の田舎侍から、雪の苗穂の大家族へ。八人きょうだいの七男は英語学者となり、海を渡り、そして池上光子と出会った。母方三百年の譜（『乾坤の譜』）と、この義の譜は、義雄と光子のもとで一つになる。その先は、現代篇『家族の歩み』が受け継いでいる。

継承ノート —— 言葉の血、動く血。母方が博士の並ぶ理系の家系であるのに対し、義雄はただ一人の文系＝言葉の人である。そして母方にも、家系最古の「語学の人」がいた——フラマリオンを訳した大沼十太郎（→『乾坤の譜』）。二系統の言葉の血は、英語教師どうしの結婚（義雄と光子）で合流し、息子たち——文雄と恵のTOEICはいずれも九三〇前後——に流れた。義雄より前の父方に言葉の人がいたかは、これからの取材の宿題である。

もうひとつの遺伝は「動く血」。大学時代に自転車で北海道を巡った義雄のバイタリティは、ロードバイクにのめり込み、会社を興し、動きつづける次男・拓也へ——自伝の題『動いて、動いて、ここにいる』は、半分はこの血の申告である。誰に何が流れたかの総まとめは、現代篇『家族の歩み』巻末「継がれたもの」に。

この巻はまだ薄い。だがそれは、物語が乏しいからではなく、取材がこれからだからである。八人きょうだいの一人ひとりに人生があり、苗穂の家に四季があり、庄内から北海道へ渡った日の決断があったはずだ。次の頁は、これからの取材を書く。

成澤勘左エ門 → 勘蔵 — とよ → **いわ = 金作（婿養子）** → **三男 甚佐久 — かつゑ**（遠縁・同姓の伝承） → **七男 義雄** = 池上 光子 → 文雄・拓也・恵 → 優太・晴香・開／太海

確定済み：①義雄の生年＝昭和18年（1943）12月14日（2026-07-23本人確認。家の旧記憶「昭和14年」を訂正）。②義雄は8人きょうだい（男7女1）の7番目。③両親＝成澤甚佐久×かつゑ。④家系図は幕末（勘左エ門・勘蔵）まで遡る。

要確認事項（今後の取材課題）

初回の本人取材を二〇二六年七月二十五日に予定。祖父母（甚佐久・かつゑ）の生業と人柄、八人きょうだいのその後、鶴岡から北海道への移住の経緯を中心に、義雄本人から聞き取る。あわせて父方家系図の現物・古い写真・アルバムの回収をめざす。

- 成沢道忠（田舎侍・鶴岡市大山）と勘左エ門の接続。この家系図は鶴岡時代のものか、北海道移住後の家のものか。
- 鶴岡 → 札幌・苗穂への移住は誰の代か、いつか、なぜか（北海道開拓・屯田兵・仕事のいずれか）。
- 甚佐久とかちゑの「遠縁・結婚前から同姓」の伝承の裏づけ。かちゑの実家はどの成澤の枝か。
- 八人きょうだいの現況（存命・居住地・職業）と、連絡の取れるいところ。
- 家系図の各日付が生年か没年か（安政5・文久元ほか）。正人の生年。4男の名。
- 苗穂の家の場所・生業（農家ではない＝甚佐久は何をしていたか）・暮らし。義雄の両親（甚佐久・かちゑ）の人柄と最期。杏の木のある家。
- 隣に住んだ長男・勝美一家（車好き・日産びいき）。子「ノブちゃん」（バイク好き・のち仙台で義雄夫妻と交流）ほか勝美の子らの名・現況。
- 『Delaware State News』の正確な掲載日、フルブライトの研究テーマ。岩見沢教育大学の正式名称（義父・茂雄の勤務校と同じなら、義雄と光子の縁の起点にかかわる）。
- 家紋・菩提寺・過去帳・墓の所在（鶴岡か札幌か）。

出典

SOURCES

- ・家蔵一次資料：成澤家家系図（2026年7月22日受領・写真）／米デラウェア州紙掲載記事（成沢義雄・1995年）＝『Delaware State News』（教育比較）・『The Dover Post』1995年4月12日（コーラ特集）・人文学名誉博士号授与写真の計3点／全訳＝素材DB「一次資料_成沢義雄_米国新聞記事1995_翻訳」
- ・成沢城の写真・絵図（表紙・第一部）：My favorite things about Yamagata（山形の城跡紹介サイト／my-favorite-things-about-yamagata.com）ほかより。私的記録として出典明示のうえ掲載。
- ・成沢城・成沢氏・成沢道忠の史実：Wikipedia「成沢道忠」「最上氏」、山形市「成沢城跡」、攻城団、城郭放浪記ほか（2026年7月調査）。詳細は素材DB「ルーツ_成沢道忠_調査」。
- ・証言：成沢義雄（生年確認 2026-07-23／誕生日と命名の由来 2026-07-22）／成沢拓也（遠縁・同姓の伝承、住まいの遍歴 2026-07-23）
- ・関連資料：素材DB「ルーツ_成沢家父方家系図」（判読メモ）／「父_成沢義雄」（人物カード）／取材質問シート（92_取材質問_父母面談）

※本書は成沢家の私的な記録として編纂したものです。「要確認」の事項は取材の進展にあわせて更新してください。姉妹編＝『乾坤の譜』（母方）・『家族の歩み』（現代篇）。

編集：成沢拓也——ただし本書は、兄・文雄（構成の提案・考証）、弟・恵（成沢城の現地写真・戸籍調査の窓口）を含む兄弟三人の協力で編成したものである。